

推薦レポート

坂本清恵先生推薦

『土佐日記』 定家本と青谿書屋本の異同をめぐって

橋 西 穂 果

本レポートは『土佐日記』定家本（担当範囲21丁裏・22丁表）と青谿書屋本を比較し考察するものである。まず、定家本と青谿書屋本をそれぞれ翻刻した。翻刻したものは以下の通りである。定家本の表記に合わせて改行して表記しており、青谿書屋本の改行は定家本の内容に合わせて表記したものである。

○担当箇所…21丁裏・22丁表

【定家本】

仲磨といひける人はもろこ
しにわたりてかへりきける時に
舟にのるへき所にてかのくに人
むまのはなむけしわかれおしみて
かしこのからうたつくりなとしける
あかすやありけむはつかのよの月
いつるまでそありけるその月は
海よりそいてけるこれを見てそ
仲まろのぬしわかくにはかゝる哥
をなむ神世より神もよむたひ
いまはかみなかしもの人もかや

【青谿書屋本】

なまろといひけるひとはもろこ
しにわたりてかへりきにけるときに
ふねにのるへきところにてかのくにのひと
むまのはなむけしわかれをしみて
かしこのからうたつくりなとしける
あかすやありけむはつかのよのつき
いつるまでそありけるそのつきは
うみよりそいてけるこれを見てそ
なまろのぬしわかくに、かゝるうた
をなむかみよゝりかみもよむたひ
いまはかみなかしものひともかうや

うにわかれおしみよろこひもあ
りかなしひもある時にはよむとて
よめりけるうた
あをうなはらふりさけみれは
かすかなるみかさのやまに
いてし月かもとそよめりける
かのくに人き、しるましくおもほ
えたれともことのをとこもしに

うにわかれをしみよろこひもあ
りかなしひもあるときにはよむとて
よめりけるうた
あをうなはらふりさけみれは
かすかなるみかさのやまに
いてしつきかもとそよめりける
かのくにひとき、しるましくおもほ
へたれともことのこゝろを、とこもしに

次に、気づいた点、疑問に思った点について考える。今回、定家本と青谿書屋本での異同について、文法と仮名遣いの二点に着目し、それぞれ考察する。

一 文法の異同について

まず、定家本と青谿書屋本での異同について考える。定家本と青谿書屋本で、明らかに文言が違う部分箇所をとりあげていく。行数は、定家本の表記のものを示した。辞書の引用は、該当する意味のみ取り上げたものである。

一―「きけり」と「きにけり」について

二行目で、定家本では「かへりきける」、青谿書屋本では「かへりきにける」となっており、その箇所の字母をみると、定家本「かへりきける」は「加部利幾介留」と青谿書屋本「かへりきにける」は「可部利支尔計留」と表記されていた。また宗綱、実隆、為相本も「かへりきける」

となっていた。これを踏まえ、異同について考察する。分解すると、「かへり+き+ける」、「かへり+き+に+ける」となる。そのため、「けり」と「にけり」の意味をそれぞれ調べた。全文全訳古語辞典によると、「けり」は過去の意味を「に」は完了の意味を持っており、「にけり」は「…てしまった」という意味であることが分かる。

けり【過去】

①《自分が直接経験していない過去の事を、他から伝え聞いたりして回想する意を表す》…た。…たということだ。

②《今まで気付かずにいた事実、初めて気付いて驚き詠嘆する意を表す》…だった。…だったのだなあ。

③《中世以降の用法》(自分の動作についても用いて)《単に過去を回想する意を表す》…た。

(全文全訳古語辞典)

に・けり

【連語】《完了の助動詞「ぬ」の連用形+助動詞「けり」

①『けり』が過去を表す場合』……てしまった。……てしまったということだ。

②『けり』が気付きを表す場合』……てしまっていたのだった。……てしまったことだ。

(全文全訳古語辞典)

この箇所は「唐土にわたりてゝ時に」のゝにあたるものである。この部分は「帰ってきた時に」というような意味であると想定され、過去のことを指しているという点で過去の助動詞「けり」は適切であるといえる。問題は「に」の有無だが、この部分では完了の意味の必要性が感じ取れないのではないか。そのため、「かへりきける」とする方が妥当であると考えた。

また、「きけり」と「きにけり」のどちらがより一般的であったかについて検討したい。定家本では「わたりてかへりきける時に」、青谿書屋本では「わたりてかへりきにけるときに」と表記されている。これを文脈からそれぞれ「来+けり」と「来+に+けり」と捉え、中納言の「日本語歴史コーパス」を用いて、調査を行った。今回、検索範囲を絞るために「来」と漢字で検索した。

書字形出現形が「来」、後方共起の書字形出現形が「けり」で検索したところ、奈良0、平安5、鎌倉6、室町0、江戸0、明治大正昭和0という結果であった。具体的な作品を見ていくと、平安は、『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』『源氏物語』の用例がそれぞれ一例ずつであった。その用例は以下の通りである。文章は『日本古典文学全集』⁽³⁾による。

『竹取物語』かの唐船来けり。

『伊勢物語』年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗みいでて、

いと暗きに来けり。

『大和物語』さいふ人も聞えず」など、いとはなくいひつつ来けり。

『平中物語』かかりけるに、くそたち来けり。

『源氏物語』あまりの難も出で来けり、対の姫君をさは生ほしたてじ、と思す。

鎌倉は、『今昔物語集』が五例、『宇治拾遺物語』が一例であった。

『今昔物語集』大宮の上に泣く泣行けるを呼ければ、走り来けり。

而る間、従者共数来けり。

長秀寄て、刀を以て桂心有る所を切取て、宮に来けり。

艶ず怖き鬼共車の前に向て来けり。

本より何にして出来けりと知す。

『宇治拾遺物語』そこに聖の鉢は常に飛び行きつつ、物は入れて来けり。

また、書字形出現形が「来」、後方共起の書字形出現形が「に」「けり」で検索したところ、奈良15、平安41、鎌倉40、室町0、江戸1、明治大正昭和0という結果であった。具体的な作品を見ていくと、奈良は、一五例すべて『万葉集』の用例であった。平安は、『古今和歌集』五例、『伊勢物語』四例、『大和物語』五例、『蜻蛉日記』三例、『源氏物語』七例などの用例があった。用例を一例ずつ程挙げていくと以下のようになる。

『古今和歌集』年のうちに春は来にけりひとせを去年とやいはむ
今年とやいはむ

『伊勢物語』狩りくらしたなばたつめに宿からむ天の河原にわれは
来にけり

『大和物語』ひねもすに待つとてさへも嘆きつるかなとありければ、

まどひ来にけり。

『蜻蛉日記』 漁火もあまの小舟ものどけかれ生けるかひある浦に来にけり

『源氏物語』 うち払ふ袖も露けきとこなつに嵐吹きそふ秋も来にけりとはかなげに言ひなして、

鎌倉は、『今昔物語集』一七例、『宇治拾遺物語』一一例などの用例があった。こちらと同じく用例を一例ずつ程挙げていくと以下のようになる。

『今昔物語集』 南の山の辺なる柚より空を飛て、都を造るる所に来にけり。

『宇治拾遺物語』 しばしばかりありて、この女を呼びければ、出で来にけり。

『新古今和歌集』 神なびのみむろの山の葛かづらうら吹かへす秋は来にけり

このような結果から「来にけり」に比べて、「来けり」の用例は非常に少ないことが読み取れる。また、用例から「来けり」は地の文で使われることが多いことがわかる。対して「来にけり」は地の文で使われている用例もあるが、歌で用いられている例も多いようであった。「来けり」も「来にけり」も用いられていたが、地の文だけでなく歌でも用いられることの多い「来にけり」のほうが多くの用例がみられる結果となった。このことから、「きけり」がもとのかたちであり、和歌などで多用されたことにより「きにけり」に変更されたと考えることができる。また、青谿書屋本のみが「きにけり」であること、他の系統本も「きけり」であることを考えると、貫之時代は「きけり」であった可能性が高い。そのため、『土佐日記』のこの部分では、「きけり」が適切な表現であると

いえる。

一―「かやう」と「かうやう」について

十一行目で、定家本では「かやう」、青谿書屋本では「かうやう」となっており、その箇所の字母をみると、定家本「かやう」は「可也宇」と青谿書屋本「かうやう」は「可宇也宇」と表記されていた。これを踏まえ、異同について考察する。全文全訳古語辞典^{〔1〕}で調べた結果、「かやう」、「かうやう」どちらも「かくやう」が変化した形であることが分かる。

かやう【斯様】〔・ヨウ〕

〔形容動詞ナリ活用〕《かくやう》の変化した形《このようである》。

（全文全訳古語辞典）

かうやう【斯う様】〔コウヨウ〕

〔形容動詞ナリ活用〕《かくやう》のウ音便《このようである》。

（全文全訳古語辞典）

続いて、歴史コーパスで「かくやう」「かうやう」「かやう」の使用例を見ていく。書字形出現形「かくやう」で検索したところ、平安四例のみという結果であった。書字形出現形「かうやう」では、奈良0、平安42、鎌倉1、室町0、江戸0、明治大正昭和3という結果であった。なお明治大正昭和の三例は『太陽』（1895年創刊雑誌）の用例であり、古典作品の引用を含むものであった。書字形出現形「かやう」では、奈良0、平安300、鎌倉115、室町148、江戸36、明治大正昭和

105という結果であった。

これらの結果から、「かくやう」から「かうやう」さらに「かやう」と変化をしたものであるとわかる。「かやう」は現在まで使用例があるが、「かうやう」は中古までで使用例がない。歴史的仮名遣いでは「かやう」であるが、「かくやう」が変化した形であるという点は一致しているため、「かうやう」「かやう」どちらであっても意味にかわりはない。そのため、定家が新しい語形であり、使用例も多い「かやう」に直したと考えられる。

一三 その他

三行目で、定家本では「かのくに人」、青谿書屋本では「かのくにのひと」となっており、その箇所をみると、定家本「かのくに人」は「加乃留久尔●」と青谿書屋本「かのくにのひと」は「可乃久尔乃比止」と表記されていた。これを踏まえ、異同について考察する。「の」の有無によって大きな差はないものの、「くにのひと」の方が「人」が強調され、「くに人」はその国に属する人という意味が強調されるような印象を受ける。

九行目で、定家本では「わかくには」、青谿書屋本では「わかくに、」となっており、その箇所をみると、定家本「わかくには」は「和可久尔者」と青谿書屋本「わかくに、」は「和可久尔、」と表記されていた。これを踏まえ、異同について考察する。この箇所は「ゝかゝる哥」と続く。「は」は主題を示す係助詞、「に」は場所・時を表す格助詞であると考えられ、「に」の方が自然な文になることから、「わかくに」がより適当であると考えられる。

一九行目で、定家本では「ことの」、青谿書屋本では「ことのこゝろを」

となっており、その箇所をみると、定家本「ことの」は「己止乃」と青谿書屋本「ことのこゝろを」は「己止乃己、呂乎」と表記されていた。これを踏まえ、異同について考察する。

日本国語大辞典によると、「ことの心(こころ)」の意味は、「(1)言っている内容。事柄の意味。趣意。」であるという。

この箇所は「思ほえたれどもゝを男文字にさま書きいだして」(漢字でおおよそを書き出して)のゝにあたる部分である。「ことの」では、何を書くのかという部分がよくわからないが、「ことのこゝろを」であれば、「何を」という部分が補われていて欠けがない状態であるといえるであろう。そのため、「ことのこゝろを」の方がより適切であると考えられる。

二 仮名遣いの異同について

次に「お」と「を」の異同から読み取れる、定家本と青谿書屋本の採用されている表記の方法の違いについて考える。定家本と青谿書屋本で「お」「を」の表記に異同がある部分をみていくと、「おしみ」と「をしみ」、「おとこ」と「をとこ」の計三カ所が該当したため、その箇所を検討していく。

二一 「おしみ」と「をしみ」

まず、「おしみ」と「をしみ」の異同について検討する。四行目と十二行目の二カ所で、定家本では「おしみ」、青谿書屋本では「をしみ」となっており、その箇所をみると、定家本「おしみ」は「於之美」と青谿書屋本「をしみ」は「乎之美」と表記されていた。これを踏まえ、

表記の違いについて考察していく。「惜しむ」の歴史的仮名遣いは「をしむ」であり、東・国・陽では「おしむ」で記載されている。アクセントはししHで、アクセントに基づいた仮名遣いでは「おしむ」となる。このことから、「おしむ」としている定家本ではアクセント仮名遣に合わせた表記を採用しており、「をしむ」としている青谿書屋本は、貫之時代の「お」と「を」とが発音上の区別を持っていた時代の表記を受け継いでいると考えられる。

二二「おとこ」と「をとい」

続いて、「おとこ」と「をとい」の異同について検討する。十九行目で、定家本では「おとこ」、青谿書屋本では「をとい」となっており、その箇所をみると、定家本「おとこ」は「乎止己」、青谿書屋本「をしみ」は「、止己」(、の前の文字は「乎」と表記されていた。これを踏まえ、表記の違いについて考察していく。「男」の歴史的仮名遣いは「をとこ」であり、東・国・陽では「於とこ」で記載されている。アクセントはししHで、アクセントに基づいた仮名遣いでは「おとこ」となる。そのため、定家本に出てくる「乎」は「を」ではなく「お」として使用しているものと考えられ、「乎止己」は「おとこ」という表記を採用することとした。このことから、アクセント仮名遣に合わせた「おとこ」表記を採用する定家本に対して、「をとこ」としている青谿書屋本は、貫之時代の「お」と「を」とが発音上の区別を持っていた時代の表記を受け継いでいると考えられる。

二三「あをうなはら」の表記について

次に、定家本で使用されている「乎」を「お」と「を」とどちらで取るべきかを検討する。

その箇所の字母をみると、定家本は「安乎宇奈者良」と青谿書屋本は「安乎宇奈波良」と表記されていた。青谿書屋本は「あをうなはら」であるが、定家は「乎」を「お」としても使っていたため、定家本のこの箇所では「安乎宇奈者良」は「あをうなはら」「あおうなはら」どちらの表記を採用するべきかを検討する必要がある。歴史的仮名遣いは「あをうなはら」であり、東・国・陽でも「あをうなはら」で記載がある。このことから青谿書屋本の方は歴史的仮名遣いを採用したと考えられる。定家はアクセント表記を採用していたと考えられるため、アクセントから「乎」がどちらの表記であったか考えていく。

次に、「あをうなはら」のアクセント表記について考える。『日本語アクセント史総合資料索引篇』⁴⁾によると、「あをうなはら」はこのようなアクセントであった。以下の表(表一)はそれをまとめたものである。

(表一)

		アクセント	資料
あをうなはら	青海原	LLLHLL	神紀、巫私
		LHLHLH	名義
		LHLLLH	名義
		HHHHHL	巫私
		HHHLLL	京ア
あを	青	LX	正通
		LF	京ア
あをし	青	LLF	名義、人紀、俱舎、四座

・資料名（略称の字音読み順）

京ア…現代京都アクセント
 俱舎…俱舎論音義
 四座…四座講式
 神紀…日本書紀 神代卷
 人紀…日本書紀 人皇卷
 正通…和字正濫通妨抄
 巫私…御巫本日本書紀私記
 名義…類聚名義抄

この資料では、五種類のアクセントが示されており、ゆれが生じていることが読み取れる。また、資料の部分を見ると、巫私ではLLLHLとHHHHHLの両方が使用されているように、同じ資料であるにもかかわらず、違うアクセントが示されているものがあることがわかる。これは、「あをうなはら」という言葉は、ゆれが生じたまま様々なアクセントで使用されていたということであろう。参考として、「あを」と「あをし」のアクセントものせたが、「あをうなばら」のアクセントを考える際の手がかりにはなりそうにない。他の「あを○○」という言葉のアクセントもかなりばらつきがあり、法則などはつかめなかった。このことから、「あを」自体がゆれの生じやすい言葉となっているのではないかと考えられる。定家本の「乎」をどう捉えるかについてだが、LLLHLとHHHHHLが両用されていることなどから、二音目（を）か「お」にあたる部分）が、LとHのどちらであるのか結論を出すのは困難であると判断した。歴史的仮名遣いに従うと「あをうなはら」

表記であることを考えると「乎」を「を」としてしまいたくなるが、定家が「お」として使用した可能性を捨てきれない以上、断言は避けるべきであると思う。

三 最後に

定家本の書写について、文法の面では、定家の時代に一般的に用いられていた表記に書き換えを行っていると見える。また、定家自身の解釈を取り入れ、助詞の書き換えなどを行っていると考えられる。仮名遣いの面では、定家の時代のアクセントに基づいた仮名遣いで表記していたといえる。このように、定家本の写本では、定家が時代や自身の考えに合わせて書き換えを行っていたといえるのである。

【引用文献・サイト】

- (1) 『小学館全文全訳古語辞典』（小学館、二〇〇四年）JapanKnowledge 版
- (2) 中納言日本語歴史コーパス
- (3) 『日本古典文学全集』JapanKnowledge 版
- (4) 秋永一枝、上野和昭、坂本清恵、佐藤栄作、鈴木豊『日本語アクセント史総合資料 索引篇』（東京堂出版、一九九七年）

【参考文献】

- ・『『仮名文字遣』三本校合索引』
- ・池田亀鑑『古典の批判的処置に関する研究第三部』（一九四一年、岩波書店）
- ・坂本清恵『『土左日記』はどう写されたか―古典書写と仮名遣い―』（『論集』一三号、二〇一七年）
- ・『角川古語大辞典』（角川書店、一九八二年）JapanKnowledge 版
- ・『日本国語大辞典 第二版』（小学館、二〇〇〇年）JapanKnowledge 版